

塩飽諸島の産業・教育・その他

香川県丸亀市本島、牛島
香川県坂出市与島

・松村周介

——産業分布——

漁業

瀬戸内海に位置する島でありながら漁業による生計を立てている家は少なく、全島住民の約四分の一に過ぎず、その漁獲法は極めて小規模で、これによる所得も又、全島所得の一部分を占めているに過ぎない。この島で漁業だけによる生計維持を行なっているのは、本島南部に位置する小坂部落（約80戸）だけとなっている。彼らだけがこの近海の漁師の用いる釣漁ではなく、網を使用している。故に後で述べる半農半漁よりも技術的集中が容易であり、生活水準も高い原因になっている。漁獲物はタイ、フグ、エビ、カジ貝等が主なもので、獲れたものは直接丸亀市内に揚げられるが、水揚げ高は月平均5万円と推定されるが、漁船、網の消却費を差引けば生活費ぎりぎりの線とされている。以上は集中漁業の場合であって半農半漁を行う生活者の海上での収入は更に微々たるもので、あくまで副業的域を脱し難い。又この場合漁法は一本釣で沿岸漁法と来ているから、その水揚げは察するに余りあるものである。とみに最近、この近海の漁場は減少され、魚獲も少なくなり、年々水揚げ高は減少しており、漁業従事者も陸に上りつつある。又漁船の遭難であるが、近海漁業の爲、天候による事故は全然認められないが、この塩飽諸島の向を瀬戸内海航路が通っており、皮肉にもこの航路に魚が集まるため、漁師は最後の手段として漁業禁止区域内で漁業を行なっており、大型船舶との接触事故が多く見られるようである。これは他方より眺めると、船舶の航行をよりむずかしくしているのではないだろうか。

では今後の漁業は、いかに処理されるべきだろうか。それには漁業技術の向上、漁具の近代化も考えられるが、島民に取って、これらの改革は経済的理由より考えられず、まして漁業組合の合理化も行なわれていない現在、他山の石、同様に考えられているだろう。最後に浮び上がってくるのが養漁池の建設である。これは本島の北端、笠島沖の浅瀬を利用した奥田による収入で生計樹立を計ろうと云う

ものであるが、もし完成した場合、その収獲高は奥田として全国第一と見積られている。しかし現在、これに対する具体的な策は本島として持っているようでなく、丸亀市としても対策の段階に入っていない模様であり、この奥田の建設には相当額の費用を要し、国庫負担の陳上や、丸亀市の赤字財政を照らし合せると前途多難の感はまぬがれないが、完成の可能性も皆無ではなく、島民の飛躍した、決断力と情熱を必要とされる所であろう。

農 業

ここに於ても農業従事者（農家）は全体島の四分の一を占めている。島の80%までが山地で産業を起すだけの能力を持たず、島に残る老人と婦人、それに僅かの男性によって耕作されており、全農家の平均耕作面積は約15アールである。（20aとも聞いている）これは全国農家の平均耕地面積約60アール強に比較して農業そのものの本質からして生活維持が如何に困難であることを証明しており、更に今年度の農林省が発表した、理想的農業（家）の一户当りの作付け面積150アールに比較した時、本島に関しては最早「農業」という言葉は抹殺されてしまうであろう。

作物は主にさつまいも、米、玉葱、小麥、キビ、アワ、それに少量のみかん、タバコ等である。さつまいもは山の斜面に植付けられており、食用とされるが、外に工業用として、澱粉、焼酎の原料として輪切り乾燥したものを、1Kg 20円程度で丸亀市内に送られているが、その反当りの収獲高は低く、農業技術の未熟さがうかがえる。

玉 葱——これも比較的収獲はあるが、丸亀市内の市場までの運賃を差引くと、大した金額にならない株である。

米——やはり米が島民の主食となるのであるが、稲の作付け面積はさらに少なくその収獲高は島の1ヶ月分の量しかまかなえない状態で、少しではあるがアワの栽培も見られる。

ここで問題となって来るのが気候風土に最適の柑橘類の生産であり、市も特にこれを奨励、夏柑の植付けを勧めている。

みかん栽培は一部であるが行われているが、まだまだ試作的段階としか見えない。夏柑栽培の立地条件は、一年の平均温度が15度以上で冬季零下5度を下らない所で、土質は砂質壤土で、排水が良好であり且つ保水力のある土地であれば良いとされている。この場合、傾斜地の技術について考えねばならぬ所がある

が、大概にして密柑作りは山地に見られることが多く、耕地の配分、排水の問題から見て傾斜地活用の果樹園は多い。

しかしてこの島の場合も果樹園としての将来性も大いにあるわけであるが、これに対する島民の考えはいかなるものだろうか。

これは島の生活のあらゆる面においてきえることだが、漁業においても農業に關しても島内に関する限り、あらゆる面において島民は積極性と情熱が衰失している感が多分にあり、このみかん栽培においても同様で、積極性が見られないと云うことだ。彼等は今、植えつけているさつまいもの代りに、まだ植えたこともない密柑を植えることに不安を感じ、はたしてどれだけの収穫があるか、又果樹園として成功し得るかどうかが、もし植え付けが成功しても、それが京阪神に市場を獲得出来るかということ、換言すれば既成市場地域に横から割り込めるかどうかという疑問など彼らには決断力を鈍らしているのだ。さらに植え付けから出荷出来るまでの育成期間を何によって生活の糧を得るかが問題であって、ましてやこの企業が完全に軌道に來るまでの長い年月を考えた時、彼らは一層消極的にならざるをえない筈である。

この上一番の病となっているのが青年層の不足であり、農業に当たっている大部分が、相当年配者、老人、婦人であって見れば、なおさらこの計画の困難性を感じるのである。

この様な一種冒險的事業に於ては熱血多感な青年の勇氣、情熱、研究心を必要とすることは島にとって致命的である。

市の密柑栽培奨励もいかにどの範囲で行なわれているかも問題で、奨励する限り、技術的、財政的援助も、より強力なものとし、その将来にある程度の保証を示さなければならぬ。

農業協同組合

その活動は目に見えて小さく、貯金のための利用と肥料購入位にしか利用されない。

石 材(与 島)

塩飽諸島、与島^{ヨジマ}は坂出市の行政下にあり、諸島中、最初に吸収合併された島である。島住者の大部分が石材産業に従事、又は聖宮を行っており、他に石材輸送にたずさわっている。

種類は花崗岩で港湾用、家屋の基礎石、建築資材、路面電車線路の敷石等に使

用されるもので、月産 トン程度である。

防潮堤用石材、護岸用石材はかなりの需要があり、1個当りの相場が30円程度で業者に売渡されている。

この値段も、昭和25、6年の70円を頂点に毎年値下りをしている状態で関係者を悩ましている。しかしこの場合、一番の被害者は石切り、その他の労務者であって、値下りのしわ寄せは賃金の低下となって彼等の生活に押し寄せてくるのである。

石材自体も、最近のセメント・ブロック、アスファルト、人工大理石、セメント等の科学材料に押されて来ているらしい。又島内の資源埋蔵量にも限度があり、最近では運び易い海岸ベリは採石されて、相当奥深く入り込んでおり、人件費の増加をよぎなくされている。この様に考えると将来性は、はなはだ不安定なるもので、対策の必要性を感じさせる。現在の石材労務者の平均所得は1万54円程度で漁業者(師)の1万円弱よりも生活程度(水準)は高いと考えられる。又実際見たところ、生活は、はなはだ安定したものの様に感じられた。

— 教 育 —

小 学 校	泊 尻 浜	} 本 島	1 校 1 校	生徒数	
				男 人	女 人
	牛 島	(中学校併設)	1 校	小中学生合せて 39人	
	手 島		1 校		
	広 島		校		
中 学 校	本 島 (泊)		1 校		
	牛 島		1 校		
	手 島		1 校		
	広 島		校		

教育施設は一応整っているが、その設備に多少の疑問点があり、二二においても、国内各地に見られる、辺地教育的難点がかくしきれない。母親が子供の教育上の責任を負わされており、父親は労働の関係でタッチ出来ないのが現状である。しかし、この母親の教育関心も、生活のために思うにまかせず、家庭での教育は放置されがちである。学力も泊校が良好とされているが、それでも丸亀市内の学校と比較した時、その学力は65%位に落ちるとされている。

中学生の高校進学者も、時代の波で、相当多くなったが、全生徒の25%弱で、市内の60%には問題とされない所である。

進学者は主に丸亀市内の学校で、下宿を強いられており、月当りの費用は最低6000円が必要であり、進学させる家庭は相当の困難をせねばならず、勢い、進学者数は正えられている。

ちなみに、泊の本島中学校を例にとると、全校生徒数が169人、内

3年生	57人
進学者数	14人
出縁(就職)	36人
残留者	7人

生徒の進学希望者は男子の場合比較的多いが、女子はあまり望まず、就職を希望する者が大部分である。又、島に残る事を希望する者は皆無という状態である。

これでわかるように、生徒は一人として、島に残りたがらず、全て島より抜け出そうとする気持ちが現われている。

しかし、これらの子供達は何を考えているのだろうか。彼らは確かに島を出たがる。しかし、島を出て、そこで何をして、如何に生活するかは、皆目解っていないらしい。進学を希望するにしても、それだけの学力を備えているか、又それだけの学力を得るために勉強する意欲を持っているかが問題である。

与島の先生の話す例を見て見ると、

彼らには、勉強意欲はほとんどなく、と云って島にいるのもいやがり、進学者は極く少数に限られ、先生が進学を勧めても、それを避けるような態度を取り、最後には、進学はしたいが、試験のある学校はいやだと云う始末で、又就職にしても、極力、試験の行われる所を、避けようとする様子が見られる。又坂出市内の研究会には生徒を出席させる様に仕向けるのであるが、これも嫌がり、出席しても何らの発言、発表をもしなく、出席する事自体が、大きな重荷の如くに見えるところで、ここから考えられることは、やはり離島という、劣等感を多分に持っている傾向がある。

この様に見ていると、この島の教育というものはいかに困難であるかがうかがえるわけだが、それではこの様な子供達にどんな教育をやればいいのか。

オーに貧しさからの脱却、離島劣等感からの解放が問題となり、中でも、この劣等感を強く打ち消さなければならない。

貧乏、華やかな消費文化地への遠さ、そして意識の最も奥に潜むものゝ海賊又

は流人種族「朝鮮征伐の時の掬りよとも云われる部落がある」が、一層彼等をそうさせているのだ。彼らは島を一步出ると、俺達（わが）は島の者だと卑下し、出稼地での生活で劣等感を出し、近代産業への適応を困難にし、いつまでも臨時工的労働者にとどめている。

このような観点より、島民の意識、行動性をさらに具体的に設定し、教育の路を明らかにしなければならないだろう。それには発想と行動性、そして勇気決断力のある子供を目標に、その人間像が現在実践性を失わず、大きい見通しの中で正しく、方向をとらえる人間の主体性を確立することではないだろうか。最後に問題となるのが、教師の赴任期間である。これは辺地学校の全国的傾向であるが、その大部分が2年未満で内地に帰ってしまう事である。この学校も他県にもれず、大部分の先生は2年で丸亀市・坂出市へ帰って行くのである。教師は島内に宿泊施設をもたず、船で毎日通勤しているが、年中遠い距離を往復することは苦痛であり、それ以上に島の学校の設備が悪く、生活が不自由である上、生徒の無気力を見る時、彼らは、2年の年月の終ることの早からんことを願うということである。又島民の先生に対する協力性も極めて薄く感情は良好と云えない状態である。

又ある島では先生が土曜日になると、船の便にまに合うように、授業を放棄して丸亀市へ帰って来る事が、しばしば見られると云うことだ。この様に教育者自体が、辺地教育を見ずてている様な感がある時、子供達はいかに教育されて行くのだろうか。先生自体が島流し的観念を持っているようではこの島の教育はすくわれないだろう。

今一度くりかえすが、島の教育は

この島から出ていく人間ではなく、この島で働く人の人間像をもって教育し、島を出て再び島に入ることなければならない様な教育はさなければならないだろう。

そして問題を島の社会経済の内部構造に求めその解決に立ち働く心性の形成に向かつて努力しなければならない。

—— 施 設 ——

極めて乏しく

保健衛生

生活程度は低いが比較的健康体が多く、風土病的なものは全然見られない。

病気は食中毒がトップを占めているが、衛生思想にいささか難点を感じないこともないが、食中毒になること以上に、他の病気が少ないとの見かたもあるわけである。

施設としては、本島に岡山大学附属病院があり、かなり利用されている。

保健面では丸亀市より月2回保健船が順廻している。内容は健康相談・レントゲン撮影・予防注射・消毒等を行ない、島民の健康維持に当たっている。

今一つ、瀬戸内海保険船なるものがあるが、その活動はこの島まで及ばないのが現状とのこと。

島では急病に備えて、俗名「医者イラズ」(サボテン科)なる薬草を各家庭に植えているよし。それでも効かない場合は、附属病院が治療に当たるとのことだ。

—牛 島— —手 島—

保健船が月2回、丸亀市および坂出市より巡廻しており、月1回はレントゲン撮影も行う。しかし手島の如きは、完全なる無医島であって、しかも、医療器具は、小中学校にわずか赤テンとヨードタンキがある程度との先生の語にはいささか我々も恐れ入った災オである。ここも以前には医者が居たのだが、2万円程度の月給では生活出来ず、最低5万円を出さないと、医者が来ない状態で、島の財政が許さず、出張所長も、どこかに篤志な医者がいないものかと、探している。

この様な状態からせめて学校には整備された医療器具を置き、注射の出来る位の先生はほしいものである。

この諸島は前にも述べた如く出稼が多く、風土・環境の差の激しい都会に出た場合、結核・その他の病気になる人が少なくない。又感染した事を知らずに島に帰る事もあり、家庭内での結核感染も見られる。

—結 婚 問 題—

出稼先の取場結婚もかなりあり、結婚後は島に帰って生活する者はほとんどない。島内での結婚(島で生活している者の結婚)は親の知合い同意で決め、方法は見合がほとんどを占めている。だから当人の意志は軽視されがちとのこと。実際においては島内の人同意であれば、見合も形式的で親の意志による事が多い。しかし、島の女性は大抵出稼に行く為島の青年に取ってはなかなかの結婚難との事、青年の語るには「若い娘は島の外へ嫁にいて、娘は外の男達にかっさらって行かれるが、他所から島に嫁に来てくれる者はなかなかないワ」といささか

深刻な表情である。

しかしながら、この島で結婚して島に残る者は段々と少なくなっているそうである。

—— 観 光 ——

すでに香川県観光課では塩飽諸島（特に本島）を観光地に指定しており、丸亀市でも、観光案内パンフレットを発行している所を見ると将来観光地として発展をすつもりようだ。確かにこの島々は瀬戸内海随一の美しさを誇り、旅行者を魅了する事が出来る。

又、何にも俗化されていない島であって見れば、都会人を一層引きつけるだろう。しかし、文化遺跡をもって、観光地を条件付けるには、完全なる遺跡の多くない事、整備の不行きとどきが目につくようだ。又宿泊施設、その他の諸設備の不完全さは、まだまだ観光地としての条件にはほど遠い。事実、産業は大した物を持たぬし、柑橘類の発展性も薄いとなれば、観光地が一番の可能性を持ってくるようになる。しかし、現在の本島内の観光課は微々たる物で、ここでもご多聞にもれず財政難により動きがとれないといったのが実状であって見れば島民の一層の努力が必要となってくる。

—— 総 論 ——

本島を見ても、人口2,700、周囲20KMに足らぬ狭い島は、その8割を山と岩石で占められ天然資材に乏しく、市場より遠い。その上、老人、婦人、子供であって見れば、すでに島の人口を養うに足りる生産力を持っていないのである。少々実力があれば島を出て行くし、平均所得1万円程度、扶養家族4~5人をこれで養うほどの農漁村。ここの場合も一部を除いて漁業、農業それ自体がすでに一つの産業といえないほどになっており、密柑にしても、最近では全国的に植付け面積が増加、市場を近くに持つ生産地に押されて前途は必ずしも明るいとは云えない。こうして見た時、島は日本と、その背負う悲劇の典型的表現であると云える。

ただ彼らは子供も大人も、文字通り岡山と香川を結ぶ、一大夢のかけ橋の建設に夢をたくしているかの様だ。

又、彼を最も住みにくく、消極的にしている住民の保守退嬰、彼ら島民の最も恐れること、それはのがれる道すらない、顔と顔を突き合せて生きている島で、

小数派、孤立者になることである。意識、行動の保守性は、この不安と恐怖から自己を守る唯一の生活態度として、島民を一層消極的にしているのではないだろうか。

これらの悩みの唯一の安易な解決策、それは島からの逃避である。私は、全部がこの島に滞まって貧乏に耐えろと云うのではないし、又、出て行くのを止める権利はさらない。

しかし、現在住んでいる人口（戸数）ぐらいは立派に生活出来るだけの糧は、この島から作り出せるようになってもらいたいものだ。

この点、つまり、島からの逃避か、島に残って再建するかのところに、この島の運命がかかっているのではないだろうか。

現在、若い力を持っていない。しかし次の世代には立派に作り出せる芽を持っている。これを育てなければならない。

島の先生も、この子供達をどう指導すればよいのか、迷っているだろう。「この島を捨てて他処で成功しなさいとも云ってやりたい。又、この島をもっと立派なものにしてやりなさいとも云ってやりたい」これが先生の偽わらざる心境でないだろうか。だが島の教育はあくまで、ここから出て行く者のための教育でなく、ここで佇く者のための教育が本当ではないか。

この様に、半農半漁が暢気に見えても、く事実我々にも表面だけは、確かにのんびりしたものゝ如く見えたが-----）。しかしそれは生活水準を大きく切り下げて、僅かに主食を自給出来ているだけの語であって、この様な風光明媚な瀬戸内海塩飽諸島の人々の生活は、決して風景ほどのどかなものではないだろう。

尚文章中に島民という言葉を使用したりしたが、決して輕べつ 的意味を持たぬもので、この島を卑下する様な考えは毛頭ないから左様御りようしよう願いたい。

附 記

以上の如く、実にまとまりのない事を書いて、読みづらい事と思いますが、拙劣、乱筆は、今に始まった事でなし、自分もこれが限度と、あきらめている次第で、平に御容赦願いたい。

ただ、今回の調査に当って残念に思う事は、数計的内容がほとんどといってよい位、出てこなかったことで、面積、各品の人口所得、その他もろもろの数字がないことは調査としてはなほだ、見劣りがするものになってしまったと考える。

又、自分のこの報告書は、大体に於いて、忠実に記したものだと思っているし、又事実を故意に曲げたりはもちろんなかったが、調査そのものに向違があったかもしれず、確実に正しいものとは断定しがたく、これをもって調査報告としないことはもちろんだろうが、他の全部をもって報告書とすることも、はなはだ危険な感じがする。もし調査発表を探検部外に出すとすれば、こんどの調査書の細部に涉って、今一度の確認を必要とするのではないだろうか。それは、これを発表するに、塩飽島があまりにも近すぎるし、オー真実性を少しでも欠いていたならば、これは調査報告としては立派なものでなくなるだろう。

技術とサービス本位

御整髪はゼヒ

矢根理髪店

大学正門前

制服 制帽 金釦 名刺
バッチ バックル 各種マーク

大 学 堂

吹田市千里山 関西大学前
自宅 京都市左京区下鴨夢倉町22番地